



第6部 京都先端科学大

⑩ 里山環境研究室 自然の再生力 焼畑農業

薪や炭づくりのために木を切ったり、堆肥用の落ち葉を掻いたりすることで、明るい林床が維持されてきた里山林。そこでは人と自然が共存しながら、鬱蒼とした原生林とは違う生態系が築かれてきました。

ところが、近年の人々の暮らしの変化に伴い里山林が放置され、明るい環境を好む里山の生きものの生育環境が全国的に減少しています。バイオ環境学部がある亀岡市には、コナラやクヌギなどの陽樹で構成される里山林が残っていますが、詳しく調査をしてみると、管理不足で暗くなりつつある林床にはこれらの幼木が育っておらず、後継樹



鈴木 玲治 教授

すずき・れいじ 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科で学位取得。博士(地域研究)。関西総合環境センター調査研究員、京大助教などを経て2011年、京都学園大准教授。19年から現職。専門は森林環境学、土壌学、地域研究。



余呉町で実践している焼畑の火入れ(長浜市)

不足の状態です。里山林の世界でも、少子高齢化が進行しているのです。そこで私が着目したのが、「焼畑」という伝統農

法です。焼畑という言葉から森林破壊を連想する人もいますが、焼畑は自然の再生力を活かした循環的な農業です。放置され荒れた里山に火を入れて作物を育てた後に土地を休ませると、温暖湿潤な日本では草むらから藪、林へと植生が自然に回復して里山が若返ります。また、火を入れると土

中の窒素が植物に吸収されやすくなり、焼いた後に残る灰も貴重なミネラル源となるため、化学肥料は不要です。地中の雑草の種も熱で発芽力を失うので、除草剤もいりません。

私が所属する里山環境研究室では、長浜市余呉町の人手が入らなくなった里山で焼畑を行い、地域の伝統的な赤カブ「ヤマカブラ」を栽培しています。焼畑の赤カブは歯ごたえがよく色鮮やかと昔からいわれま

す。里山を再生しながらヤマカブラを地域のブランド野菜に育て、地域おこしへとつなげていく実践的な研究活動を展開しています。

余呉の焼畑には毎年多くの学生が火入れや収穫に参加しており、当研究室では卒業研究に焼畑を選ぶ学生もいます。講義で学んだ知識を現場での実践に活かしながら試行錯誤を重ね、焼畑後の植生回復、火入れの施肥効果、カブの品質評価など、自らが設定したテーマで主体的に研究に励んでいます。

このような、地域に根ざした実践的な教育や研究活動は当学部の特色のひとつです。バイオ環境学部では、自然豊かで農業も盛んな亀岡キャンパスの立地を活かし、さまざまな分野での地域連携にも取り組んでいます。